

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381265

研究課題名(和文) 英語音声指導力の質的向上をはかる連携英語教員養成カリキュラムの開発・運用・評価

研究課題名(英文) The study of English language teacher training curriculum to practically improve English pronunciation and its instructional skills at teacher's college in Japan

研究代表者

大嶋 秀樹 (OSHIMA, HIDEKI)

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：90342576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究では、教員養成学部で、将来、小・中・高・特別支援学校の英語担当教員をめざす学生の英語音声・発音力、英語音声・発音指導力の向上を図る英語教員養成プログラムの開発と運用、運用を通じての開発したプログラムの評価・修正に取り組んだ。特に、英語音声・発音指導力の向上を図るプログラムについては、大学と地域の連携校との共同で研究を進め、開発したプログラムの実用化に向けた課題の検証を進めた。開発したプログラムは、2016年度から、大学機能強化事業の中で実用化を進め、大学を地域の中核とした教員養成・現職英語担当教員の指導力強化・地域に学ぶ児童・生徒の英語力強化プロジェクトの中で成果の利用を図っていった。

研究成果の概要(英文)：This study is to seek to develop and establish a curriculum for English language teacher training to practically improve English pronunciation and its instructional skills at teacher's college in Japan. The curriculum development and its practical trials were conducted jointly between a teacher's college and its local elementary, junior and senior high schools. The curriculum was practically tested and investigated from a practical application perspective for English teacher training. The outcome of the study has been put to use in the project of enhancement to English language teacher training for in-service English language teachers as well as undergraduate and graduate students since 2016. Still the curriculum developed is in progress for more practical improvement in the future English language teacher and in-service English teacher training.

研究分野：人文科学

キーワード：英語の音声力 英語の発音指導力 英語教員養成カリキュラム 実践的英語音声指導力 初・中等英語教員養成 英語の発音指導 英語の音声指導

### 1. 研究開始当初の背景

平成元年告示の学習指導要領外国語編(英語)で、「コミュニケーション能力の育成」を柱とする外国語(英語)の実践的な能力の習得が、中学校、高等学校の英語の教育課程改善のねらいとして盛り込まれ、後の2度の学習指導要領改訂(中学校(平成10年、平成20年)、高等学校(平成11年、平成21年))を経て、現在では、英語によるコミュニケーション能力の育成が、我が国の英語教育の国民的課題として定着した。

また、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」(文部科学省、平成14年)以来、検討されてきた小学校からの英語教育も、平成20年の小学校学習指導要領の改訂で、「外国語活動」として実現し、新学習指導要領では、小・中・高を通じた、英語によるコミュニケーション能力の育成のための教育課程が完成した。

この中で、特に力点がおかれているのが、「音声によるコミュニケーション能力の育成」に重点をおいた英語教育の展開である。趣旨は、小学校の外国語活動で「音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーション能力の素地の育成」が目標に取り上げられ、中学校、高等学校では、「聞くこと」、「話すこと」の一層の充実と重点化として盛り込まれ、指導上の成果が特に期待される内容となっている。

加えて、「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(文部科学省、平成23年)では、英語によるコミュニケーション能力の向上のための具体的な成果をあげるための提言に、英語担当教員の英語力・指導力の強化が掲げられた。

本研究は、こうした新しい段階を迎えた英語教育の実現のために、「音声によるコミュニケーション能力の育成」の根幹となる、英語科教員の「英語の音声指導力の向上」という課題に教員養成段階から取り組み、「実践的英語音声指導力の質的水準の向上」をはかる初・中等英語科教員養成カリキュラムを開発し、附属学校、地域の公立学校と連携したカリキュラムの運用、評価をすすめることに着目した。

本研究では、「英語の音声指導力の向上」を図る英語科教員養成カリキュラムの実現により、英語科教員の「英語の音声指導力の向上」と、児童・生徒の音声によるコミュニケーション能力の基礎である、「発音力の向上」が可能になる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、教育学部教員養成課程、教育実習を受け持つ附属学校、地域の公立学校が連携して、実践的英語音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラムの開発、運用、評価を実証的に行うことである。

具体的には、教員養成課程で初・中等英語

科(外国語活動、及び英語)教員を目指す学生を対象に、

- (1) 学生自らの英語の発音力の向上をはかり、
- (2) 学生の実践的英語音声指導力の向上をはかる、

附属学校、地域の公立学校と連携した英語科教員養成カリキュラムの開発、実施を進め、「将来の英語科教員として備えるべき実践的英語指導力、授業力」の基礎をつくる教育プログラムの構築に向けた検証を行うことを研究の目的とする。

研究の主目的は、教育学部教員養成課程と附属学校、地域の公立学校が連携して、将来の英語科教員を目指す学生の「実践的音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラム」の開発、運用、評価である。

### 3. 研究の方法

本研究では、4年間にわたり、教育学部教員養成課程と附属学校、地域の公立学校が連携して、将来の英語科教員を目指す学生の「実践的音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラム」の開発、運用、評価を行うことである。

具体的には、本研究で取り組む研究の方法は以下のとおりである。

- (1) 学生自らの英語発音力向上のためのカリキュラム開発と運用、評価をすすめる研究を、応募者が、現在、行っている英語発音力向上のトレーニングにいくつかの改良を加えながら実施する。
- (2) 学生の実践的英語音声指導力の向上のためのカリキュラム開発と運用、評価の研究を、学部、附属学校、地域の公立学校と連携して実施する。
- (3) 研究成果の教育臨床的応用に向け、発音力と音声指導力向上のための基礎資料を蓄積する。

研究の初年度2014年度は、

- (1) 英語発音力向上のためのカリキュラム開発、運用に向けた調査と準備
- (2) 実践的英語音声指導力向上のためのカリキュラム開発、運用にあたっての準備
- (3) 発音力の測定・分析のための環境整備、

を実施した。

研究2年目の2015年度は、

- (1) 英語発音力向上のためのカリキュラムの運用〔1年目〕

- (2) 実践的英語音声指導力向上のためのカリキュラムの運用〔1年目〕
- (3) カリキュラム導入後の発音力の測定・分析(受講開始時・受講後)〔1年目〕

を実施した。

研究3年目の2016年度は、

- (1) 英語発音力向上のためのカリキュラムの運用〔2年目〕
- (2) 実践的英語音声指導力向上のためのカリキュラムの運用〔2年目〕
- (3) カリキュラム導入後の発音力の測定・分析(受講開始時・受講後)〔2年目〕

を実施した。

研究最終年度の2017年度は、

- (1) 英語発音力向上のためのカリキュラムの運用〔3年目〕
- (2) 実践的英語音声指導力向上のためのカリキュラムの運用〔3年目〕
- (3) カリキュラム導入後の発音力の測定・分析(受講開始時・受講後)〔3年目〕

を実施し、本研究の評価と総括に向けた資料の取りまとめ作業を行った。

その上で、以上の研究の成果を実証的に検証するため、本研究で開発・運用した「実践的音声指導力の質的水準の向上をはかる英語科教員養成カリキュラム」の評価のため、2015年度から2017年度までの3年間について、各年度ごとに、カリキュラム実施はじめ(事前)と実施後(事後)の2回にわたり、年度ごとの調査を実施した。

調査では、開発したカリキュラムで学んだ学生を対象に、「英語の発音能力、英語の音声指導力についての質問紙調査」と「英語の発音・音声力の到達レベルの測定調査」を実施し、カリキュラム導入による「学生の実践的英語音声指導力の質的水準の向上」の評価を行い、研究の途上進捗の成果の検証を行った。

「英語の発音能力、英語の音声指導力についての質問紙調査」の内容は以下の通りである。

調査1回目(事前)は、次の2領域で選択肢回答と記述回答を組合せた質問紙調査を実施した。

- (1) 小学校、中学校、高等学校での英語の発音・音声の学習経験の調査(15項目)
- (2) 受講当初の英語の発音・音声への意識・自信の調査(3項目)

調査2回目(事後)は、次の2領域で選択肢回答と記述回答を組合せた質問紙調査を実施した。

- (1) 授業の受講終了期の英語の発音・音声への意識・自信の調査(5項目)
- (2) 英語の発音・音声、音声指導についての意識の調査(13項目)

「英語の発音・音声力の到達レベルの測定調査」の内容は以下の通りである。

まず、受講学生の英語の音声評価を行うため、2回(受講開始時・受講後)

- (1) 2種類の発音課題(単語課題(目標音(母音・子音の発音)課題を含む語の発音課題)、
- (2) discourse課題(韻律的特徴を含むまとまった内容のdiscourseの発音課題))

を与え、学生の英語の音声をデジタル録音した。録音した音声は、

- (1) 目標音(母音・子音の発音)
- (2) 目標語音(個々の語の発音)
- (3) 文章発音(まとまりのある内容の文章の発音)

の3観点で、3名の評価者(アメリカ英語母語話者・アジアの言語を母語とする英語第二言語話者・アジアの言語を母語とする英語外国語話者)(3名とも英語音声・発音教育、音声指導に知見と経験のある大学教員)が、5段階の尺度(目標音は分析的評価、語音・文章発音は全体的評価)で音声評価を実施した。

そして、意識調査・音声評価の結果を分析、検証した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の通りである。まず、開発したカリキュラムにより、以下のことが明らかになった。以下、調査により明らかになったことの概要を示す。

- (1) 英語の発音・音声への意識・自信  
(a) 英語の発音・音声の学習経験の調査

2015年度から2017年度までの3年間のカリキュラム受講前の学生の調査から、大学入学以前の段階(小・中・高)で、英語の発音・音声指導を受けた経験が全くない学生が、各1割程度いるものの、9割の学生は、大学入学以前の英語を学ぶ段階で、何らかの英語の音声・発音に係る指導を、経験的、或いは、明示的に受けてきていることが明らかになった。

内容については、「音を聞いて繰り返す」経験的な学習や入試の発音問題対策が主体で、音声の具体的な作り方(articulation)を含めた音声指導を受けた経験は非常に少なく(2017年度調査で、スピーチコンテストの出場時に個別指導を受けた経験のある学生が1名いる

のみ)、自分の英語の発音・音声が適正かどうかの判断や指導を受けたことがなく、発音に課題を感じていた。

中学・高校の時に英語の指導を受けた日本人英語教員の英語の発音レベルは高いと感じていたが、発音・音声指導については、繰り返し発音する経験的な指導が大半で、発音や音声を学ぶ手本やモデルにはなりにくい傾向がみられた。

(b) 受講当初の英語の発音・音声への意識・自信の調査

英語の発音・音声については、2015年度から2017年度までの3年間のカリキュラム受講前の段階で、受講学生全員が、自信を持たず、具体的に何をどうすればより高いレベル(intelligibility, accuracy)に到達できるかわからないと感じ、全員が発音の改善・向上を希望していた。

また、発音向上のための基準が不確か(英語母語話者であれば誰でも発音モデルになるというような考え)で、自己流で発音を学んできたため、自分の発音が日本語の発音の代用が多いと感じているが、英語の音声の作り方(articulation)や自分の発音の修正の仕方がわからないので、発音について自分は具体的に何をどうすればよいかわからないという回答(記述回答項目)内容が多くみられた。

(c) 授業の受講終了期の英語の発音・音声への意識・自信の調査

英語の発音・音声のことを音の作り方や具体的な指導例を体験的に学べ、受講前に比べ、自分の英語の発音・音声の向上、意識の変化を感じていた、発音への意識が高まったことを多くの学生が感じていた。一方で、自力での受講後の継続的な発音の向上・維持に不安を感じていた。

(d) 英語の発音・音声、音声指導についての意識の調査

小・中・高での音声指導、英語教員の高い発音力・指導力の必要性を強く感じていた(英語の授業で発音・音声指導が必要、英語教員は音声指導ができる発音力・音声指導力が必要)。

習得を希望する発音の到達レベルは、コミュニケーションに支障がないレベル(intelligible)の回答(記述回答項目)内容が、特に、2016年以降は、小学校からの英語を使いながら学ぶ学習経験を反映してか多くみられた。

(2) 音声評価

(a) 目標音(母音・子音の発音)  
(accuracy の評価)

2015年度平均:  $t=11.247$ ,  $p=000$

1.74(SD: .552) (事前)

3.08(SD: .498) (事後)

2016年度平均:  $t=13.448$ ,  $p=000$

2.22(SD: .418) (事前)

3.08(SD: .274) (事後)

2017年度平均:  $t=15.535$ ,  $p=000$

2.09(SD: .291) (事前)

3.34(SD: .479) (事後)

目標音については、母音・子音の種類・位置(語頭・語中・語末)により事前と事後の伸びに違いが見られた。事前と事後の評価の比較では、個人差はあるものの、目標音のについて統計的に有意な伸びが認められる傾向がでていた。

(b) 目標語音(個々の語の発音)  
(intelligibility の評価)

2015年度平均:  $t=5.350$ ,  $p=000$

2.54(SD: .498) (事前)

3.00(SD: .218) (事後)

2016年度平均:  $t=13.748$ ,  $p=000$

2.22(SD: .418) (事前)

3.12(SD: .328) (事後)

2017年度平均:  $t=15.197$ ,  $p=000$

2.27(SD: .450) (事前)

3.70(SD: .461) (事後)

目標音を含む個々の語音については統計的に有意な伸びが認められた。

(c) 文章発音(まとまりのある文章の発音)  
(prosodies を含めた intelligibility の評価)

2015年度平均:  $t=4.482$ ,  $p=000$

2.88(SD: .318) (事前)

3.25(SD: .437) (事後)

2016年度平均:  $t=8.615$ ,  $p=000$

2.34(SD: .478) (事前)

2.68(SD: .428) (事後)

2017年度平均:  $t=12.000$ ,  $p=000$

2.27(SD: .450) (事前)

3.36(SD: .532) (事後)

目標音を含むまとまりのある文章の発音については、韻律面を含め、統計的に優位な伸びが認められた。

4年間をかけて進めた研究の成果は、2016年度から、地域と連携した大学機能強化事業(滋賀大学英語教育未来創生プロジェクト)の中で実用化を進め、大学を地域の中核とした教員養成機能強化と地域の現職英語担当教員の指導力強化プロジェクト、地域に学ぶ児童・生徒の英語力強化プロジェクトの中で成果の利用を図っていった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

岡本吉世、大嶋秀樹、「日英機械翻訳において感じる違和感についての心理言語学的考察」、『滋賀大学教育学部紀要』、滋賀

大学教育学部、査読有、第 67 号、2018、pp.65-72

中内田陽子、大嶋秀樹、「効果的なフォニックス指導の一考察 - 小学校英語におけるフォニックスの必要性 - 」、『滋賀大学教育学部紀要』、滋賀大学教育学部、査読有、第 67 号、2018、pp.21-31

疋田恭子、中川恵実子、大嶋秀樹、「英語科プロジェクト」、『滋賀大学教育学部地域教育支援室地域教育連携年報』、滋賀大学教育学部地域教育支援室、査読無、第 12 号、2017、pp.37-38

〔学会発表〕(計 7 件)

亀井郁、大嶋秀樹、多良静也、「英語教員を目指す学生の英語発音能力の向上を目指す音声指導について—経過報告: その成果と課題—」、全国英語教育学会、発表査読有、第 40 回全国英語教育学会全国研究大会(於: 徳島大学)、発表予稿集、2014、pp.204-205

亀井郁、大嶋秀樹、多良静也、「英語教員をめざす学生の英語発音力・英語音声指導力への意識と学生の英語発音力の実態について」、全国英語教育学会、発表査読有、第 41 回全国英語教育学会全国研究大会(於: 熊本学園大学)、発表予稿集、2015、pp.150-151

大嶋秀樹、亀井郁、多良静也、「英語教員をめざす学生の英語発音力・英語音声指導力への意識、英語発音力の実態」、全国英語教育学会、発表査読有、第 42 回全国英語教育学会全国研究大会(於: 獨協大学)、発表予稿集、2016、pp.264-265

多良静也、米崎里、立松大祐、大嶋秀樹、「小学校外国語活動・英語教育における発音・音声指導デジタル教材開発のための基礎的研究」、小学校英語教育学会、発表査読無、第 16 回小学校英語教育学会全国研究大会(於: 宮城教育大学)、予稿集、2016、p.20

大嶋秀樹、亀井郁、多良静也、「英語教員をめざす学生の英語発音力・英語音声指導力の向上をはかる英語教員養成カリキュラムの開発と試験運用に関する研究」、全国英語教育学会、発表査読有、第 42 回全国英語教育学会全国研究大会(於: 島根大学)、発表予稿集、2017、pp.446-447

多良静也、米崎里、立松大祐、大嶋秀樹、「英語発音学習デジタル教材を利用した発音学習」、小学校英語教育学会、発表査読無、第 17 回小学校英語教育学会全国研究大会(於: 神戸市立外国語大学)、2017  
多良静也、米崎里、立松大祐、大嶋秀樹、「小学生を対象とした音の違いを理解させる教材の提案」、全国英語教育学会、発表査読有、第 43 回全国英語教育学会全国研究大会(於: 島根大学)、2017

〔図書〕(計 2 件)

大嶋秀樹、「インプットからアウトプットをつなぐリスニング指導の実践と評価 -from input perception to output facilitation- 」、『英語 4 技能の評価の理論と実践』(望月昭彦・深澤真・小泉利恵・印南洋編著)、東京:大修館書店、掲載査読有、2015、pp.234-248

多良静也、「課題解決型言語活動を支える理論」、『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型活動 自律する英語使用者の育成 』(今井典子・高島英幸編著)、東京:東京書籍、掲載査読、2015、pp.42-53

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大嶋 秀樹 (OSHIMA, Hideki)  
滋賀大学教育学部・教授  
研究者番号: 90342578

(2) 研究分担者

多良 静也 (TARA, Sizuya)  
高知大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号: 00294819